

実践報告書

広島県立黒瀬高等学校
(教諭・吉村 光伸)

本実践のポイント (高校教育指導課 指導主事 宮本 洋子)

本実践は、事例のサービス利用者に対して排泄支援を4つ(尊厳・安全・清潔・自立支援)の視点で整理する学習を通して、利用者の困りごとを的確に捉え、根拠をもった支援方法を思考させる授業実践となっています。

また、ICTを活用したりグループワークを取り入れることで対話的な学びが深まるよう展開の工夫がなされています。

1 はじめに

日本の高齢者福祉は、地域包括ケアを軸に医療・介護・生活支援を一体化し、住み慣れた地域で暮らし続ける体制強化が進んでいる。ケアの質の向上は、限られた人員・時間の中で行えるLIFE データを活用した科学的介護や介護DXの推進によって期待されている。また、フレイル予防の重視や認知症予測値の低下など、健康増進の取組も広がっている。一方、介護人材不足や財源の逼迫、一人暮らし高齢者の増加、デジタルデバイドなど構造的課題は深刻である。

こうした状況の中で、介護福祉士には専門職として、高齢者の尊厳保持・自立支援の実践、排泄・食事・移動などの生活支援における質の向上、多職種連携、ICT活用能力が求められる。また、孤立しやすい高齢者を地域につなげる役割や、家族支援も重要である。高齢者福祉は「ともにつくる福祉」への転換期にあり、介護福祉士の専門性が地域全体の生活の質を左右する存在となっている。

2 問題の所在

高齢者の排泄支援では、尊厳が損なわれやすい点が大きな課題である。また、排泄リズムや身体機能の個人差が大きく、タイミングが合わず失禁や皮膚トラブルにつながることも多い。環境整備が不十分だとトイレ移動が困難になり自立が妨げられる。一方、自立支援では、安全確保のために必要以上に介助してしまう過介助が自立を奪う要因となり、意欲低下を招くことがある。

3 具体的な取組

本時では、排泄に困難を抱える高齢者の事例を用い、まずは「尊厳・安全・清潔・自立支援」の4つの視点から事例の情報を整理し、適切な支援方法とその理由を個人で検討した。そのうえで、グループワークを通して、多角的な視点から支援の在り方を深める。

4 成果と課題

福祉現場の事例を用いて排泄の自立支援を考える際、4つの視点で情報を整理することで、利用者の問題点が見えてきた。しかし、事例の文章量が多く生徒は、全体像を十分に把握できず限定的な支援しか考えられなかった。一方、グループワークでは他者の視点が加わり全体像を理解できた生徒が多くいた。事例による情報は必要な内容に絞って提示することや、一年生は校外での介護実習の経験が浅く、排泄介助などの校内での実習も少ないため、事例の状況を具体的に想像することが難しいため、教室の前にポータブルトイレやおむつや歩行器などを設置してイメージをしやすいように授業の工夫が必要である。

5 おわりに

本時では、排泄支援を4つの視点で整理する学習を通して、利用者の困りごとを的確に捉え、根拠をもった支援方法を考えることができた。一方で、事例に病名などまだ学習していない情報が含まれていたため理解が追いつかず、限定的な支援しか考えられない生徒も見られた。グループワークでは他者の視点を取り入れることで理解が深まる場面も多く確認できた。今後は学習段階に応じた情報提示と、思考を深める授業構成の工夫が求められる。